

一般社団法人日本森林学会 2018（平成30）年度事業報告

（事業期間：2018年3月～2019年2月）

(1) 「日本森林学会誌」の発行： 2018年4月(第100巻第2号)、6月(同3号)、8月(同4号)、10月(同5号)、12月(同6号)および2019年2月(第101巻第1号)の年6回発行し、科学技術振興機構のJ-STAGEで公開した。論文22編、短報10編、総説2編、その他(巻頭言)1編および学会記事を掲載し、総計263ページとなった。ページ数は昨年度に比べて約2%増であった。第101巻第1号より、表紙写真を変更した。

(2) 「Journal of Forest Research」の発行： 2018年4月(Vol. 23 No. 2)、6月(No. 3)、8月(No. 4)、10月(No. 5)、12月(No. 6)および2019年2月(Vol. 24 No. 1)の年6回発行した。特集“Radiocesium dynamics in forest ecosystems after the Fukushima Nuclear Power Plant accident: Experiences during the initial five years”を含めたReview1編、Original Article40編、Short Communication7編を掲載した。総ページ数は396ページとなり、昨年度と同ページ数であった。電子版の周知を図るため、メールマガジンを用いて会員に発行を知らせるとともに、日林誌と学会ウェブサイトで発表論文の日本語書誌情報を掲載した。2017年のImpact Factorは0.908で、2016年(0.667)より上昇した。

(3) 「森林科学」の発行： 2018年6月(83号)、10月(84号)、2019年2月(85号)の年3回発行した。特集「未利用木材の発電利用は持続的たり得るか?」「世界自然遺産候補、沖縄・奄美の森林生態系管理」「広葉樹二次林の炭素循環研究の最前線」をはじめ、シリーズ「森めぐり」「現場の要請を受けての研究」「うごく森」「森をはかる」「林業遺産紀行」「森をたべる」等、総計170ページを掲載した。学会員の新著をより広くかつタイムリーに紹介できるよう、「ブックス」コーナーのみ会員限定公開(1年間)の対象から除外する措置を行った。オンラインバックナンバーについては、CiNiiからJ-stageへの移行を完了し、全ての号を公開した。在庫調整分の冊子体バックナンバーを編集委員や関連団体に分配し、学会入会や購読の促進等のために有効活用した。広告募集について株式会社科学技術社と広告代理店契約を締結し、合わせて広告料の見直しを行った。

(4) 「日本森林学会メールマガジン」の発行： 第94号(2018年3月)～第105号(2019年2月)を発行した。

(5) ウェブサイトの更新： ウェブサイト更新を随時行い、最新情報を掲載した。大会や表彰をはじめとする各種の学会情報を会員に発信するとともに、学会刊行物などの学会活動について随時発信・広報した。大会発表申し込みおよび発表要旨集のオンライン入稿を支援した。大会ページの視認性・わかりやすさを高めた。その他、研究集会・シンポジウムや公募等の関連情報を提供・広報した。

(6) 第129回日本森林学会大会の開催： 高知大学朝倉キャンパスおよび高知県立県民文化ホール(高知市)で開催した(2018年3月26～29日；大会運営委員長：後藤純一会員、高知大学)。研究発表は総計858件で、内訳は部門別口頭発表198件、部門別ポスター発表442件、

公募セッションおよび企画シンポジウム口頭発表 180 件、公募セッションポスター発表 38 件であった。高校生ポスター発表を併催し、22 件の発表があった。公開シンポジウム「林業大学校～その役割と目指すもの～」を、国土緑化推進機構「緑と水の森林ファンド」の助成を受けて開催した。学会企画として「観光レクリエーション分野のあり方検討会」、「男女共同参画ランチョンミーティング「海外滞在と研究者家族」、「大学院進学とその後の進路の選択ー公立研究機関、行政機関への就職ー」および「論文執筆や審査の経験を共有しよう Part 3 ～男女共同参画の観点も含めて～」を開催した。「第 129 回日本森林学会学術講演集」を発行した。

(7) 第 130 回日本森林学会大会の開催準備： 朱鷺メッセ 新潟コンベンションセンター（新潟市）での開催を準備した（2019 年 3 月 20～23 日；大会運営委員長：紙谷智彦会員，新潟大学）。2018 年 5 月 9 日に新潟大学東京事務所において大会運営委員会引継会議を開催した。公募セッションと企画シンポジウムを会員から公募し、公募セッション 5 件、企画シンポジウム 13 件を採択、14 の部門別口頭・ポスター発表とともにウェブ登録システムによって研究発表申込を受け付けた。第 6 回高校生ポスター発表を企画し、全国の高校からの発表申込を受け付けた。公開シンポジウム「雪国の森と木を活かす」を企画した。学会企画として「森林環境税（仮称）及び森林経営管理法を契機とした森づくり～森林環境税（仮称）及び森林経営管理法とは～」、「ダイバーシティ推進ランチョン Workshop 2019～森林学会の多様性について考える／今学会で必要なダイバーシティ推進とは？～」および「日林誌に論文を出す」の準備を進めた。以上を含めて大会プログラムの編成を行い、「第 130 回日本森林学会学術講演集」を編集した。

(8) 第 131 回日本森林学会大会の開催準備： 中部森林学会の推薦に基づき、大会開催機関を名古屋大学とし、大会運営委員長（竹中千里会員，名古屋大学）を委嘱し、大会運営委員会を組織した。

(9) 日本森林学会各賞の選考および日本農学賞等への学会推薦： 日本森林学会賞は、崎尾均会員（新潟大学）の「水辺の樹木誌」に、日本森林学会奨励賞は曾我昌史会員（東京大学）の「Extinction of experience: the loss of human-nature interactions」、小長谷啓介会員（森林総合研究所）の「Revisiting phylogenetic diversity and cryptic species of *Cenococcum geophilum sensu lato*」、津田吉晃会員（筑波大学）の「Multispecies genetic structure and hybridization in the *Betula* genus across Eurasia」に、日本森林学会学生奨励賞は河村和洋会員（北海道大学）の「Effects of land use and climate on the distribution of the Jungle Nightjar (*Caprimulgus indicus*) in Hokkaido, northern Japan」、伊津野彩子会員（投稿時：京都大学，応募時：森林総合研究所）の「The population genomic signature of environmental association with gene flow in an ecologically divergent tree species *Metrosideros polymorpha* (Myrtaceae)」に、日本森林学会功績賞は、藤森隆郎会員の「森林生態学に基づく持続可能な森林管理の体系化およびその現場への普及」に授与することを決定した。また、Journal of Forest Research 論文賞は、JFR 論文賞選考委員会が選考し、理事会で審議した結果、同誌 22 巻 6 号に掲載の Tsuyoshi Sato, Haruka Yamazaki and Toshiya Yoshida「Extending effect of a wind disturbance: mortality of *Abies sachalinensis* following a strong typhoon in a natural mixed forest」に、日本森林学会誌論文賞は、日林誌論文賞選考委員会が選考し、理事会で審議した結果、100 巻 2 号に掲載の平野悠一郎「日

本におけるトレイルランニングの林地利用の現状と動向 ―コンフリクトの表面化とランナーの対応―, 99 巻 6 号に掲載の久保山裕史・古俣寛隆・柳田高志「未利用木質バイオマスを用いた熱電併給事業の成立条件」に, 第 129 回日本森林学会大会学生ポスター賞は, ポスター賞選考委員会で選考し, 理事会で審議した結果, 16 名の学生会員に授与することを決定した。また, 日本学術振興会賞, 日本学術振興会育志賞, 日本農学進歩賞, 日本農学会賞について, 会員からの推薦を受け付け, 日本学術振興会育志賞に関して理事会で本学会推薦業績を決定したが, 受賞には至らなかった。

(10) 学会活動の活性化: ウェブサイトやメールマガジン等による広報活動, および連携学会・他学会・外部機関との連携強化を通じて, 学会活動の活性化に努めた。

(11) ダイバーシティ推進の取り組み: 2018 年 8 月, 12 月に男女共同参画学協会連絡会の運営委員会に参加し, 議題を話し合った。2018 年 12 月にダイバーシティ推進委員会を発足し, ウェブサイトやメールマガジン等による広報活動を始めた。第 130 回大会においてダイバーシティ推進に係るテーマに関して学会として進むべき今後の方向性を話し合うことを目的としたランチョンワークショップ (2019 年 3 月 22 日) を男女共同参画学協会連絡会後援のもとで準備を行った。

(12) JABEE (日本技術者教育認定機構) への協力: JAFEE (森林・自然環境技術者教育会) の基幹的な学会として, JABEE や JAFEE の活動・運営に協力し, 関連学協会との連携を図り, 森林分野の技術者教育の向上を進め, CPD (技術者継続教育) 事業の推進に協力した。

(13) 連携学会 (旧支部) との連携: 各連携学会 (北方森林学会, 東北森林科学会, 関東森林学会, 中部森林学会, 応用森林学会, 九州森林学会) 大会を共催し, 会長ほか役員を派遣した。また, 2018 年 12 月に第 467 回理事会と併せて連携学会長会議を開催し, 各連携学会の活動状況と課題を共有した。

(14) 日本木材学会との連携: 「日本森林学会と日本木材学会との交流に関する覚書」に基づき, 相互に理事を派遣し, また学術大会へ役員を招待した。

(15) 公開シンポジウムの開催: 2018 年 5 月 29 日, 東京・日林協会館において公開シンポジウム「林業遺産への期待と課題」を主催した。第 130 回大会の公開シンポジウム「雪国の森と木を活かす」を企画し, 国土緑化推進機構「緑と水の森林ファンド」に応募, 採択され, 準備を進めた。

(16) 国際学術交流の推進: 東アジアをはじめとする諸外国との国際的学術交流を進めた。中国林学会より招聘講演者の推薦の依頼が 2 件あり, 関係の理事とともに対応したが, 日程の調整等で無理があり, 丁重にお断りした。学会ウェブサイトの英語ページをアップデートするとともに, 第 130 回大会のお知らせの重要事項を英訳し公開した。

(17) 関連学協会への協力と社会連携の推進: 協力学術研究団体として日本学術会議に協力し, 日本学術会議の会員および連携会員の候補者を推薦した。日本農学会の運営に協力し, 運営委員

を派遣した。防災学術連携体に参加し、日本学術会議公開シンポジウム・防災学術連携体緊急報告会「西日本豪雨災害の緊急報告会」（台風 21 号の緊急報告および北海道胆振東部地震の緊急報告（2018 年 9 月 10 日、日本学術会議議室）で本学会の会員が講演した。日本木材学会および土木学会とともに「土木における木材の利用拡大に関する横断的研究会」を構成し、第 9 回木材利用シンポジウム「木材利用によるレガシーの創成に向けて」（2018 年 3 月 7 日、土木学会講堂）を開催した。森林学会も参加しているウッドデザイン賞サポート連絡会として、公募及び結果について森林学会のメールマガジンを通じてお知らせするとともに、12 月 6 日のエコプロ会場における同賞の表彰式に参加した。日本野外教育学会第 21 回大会自主企画シンポジウム「野外教育と森林教育とのコラボレーション」（日本森林学会教育部門）、第 17 回木材利用研究発表会（土木学会木材工学委員会）、産学官共済セミナー「国産早生樹センダンの使い道」（日本木材加工技術協会関西支部）、第 21 回日本水大賞（日本河川協会）、日本林業成長産業化シンポジウム「ICT スマート精密林材業によるサプライチェーンシステム in 東京」（LS によるスマート精密林業コンソーシアム）、木材利用シンポジウム in 千葉（土木学会木材工学委員会）、REDD 研究開発センター国際セミナー「REDD プラスはどこまで来たか？－機会を活かすために－」（森林総合研究所）、森林総合研究所公開講演会「水を育む森林」（森林総合研究所）をそれぞれ後援した。流体力学基礎講座（日本機械学会）、日本流体力学会年 2018（日本流体力学会）、第 14 回バイオマス科学会議（日本エネルギー学会）をそれぞれ協賛した。

(18) 国内研究機関連携の推進： 森林・林業関係試験研究機関の現状と研究推進上の課題に関するアンケート調査結果を、全国林業試験研究機関協議会において示し、意見集約を行った。

(19) 各種補助金の申請： 北方森林学会の発案により、公開シンポジウム「北海道における観光客による自然環境の利用実態と持続的利用への課題」（2019 年 11 月）への助成を受けるため、日本森林学会として 2019 年度科学研究費補助金（研究成果公開促進費）「研究成果公開発表（B）」に応募した。科学研究費補助金（研究成果公開促進費）「研究成果公開発表（B）」への発案の順番を、2021 年東北森林科学会、2022 年中部森林学会、2023 年関東森林学会、2024 年応用森林学会、2025 年北方森林学会、2026 年九州森林学会とした。第 130 回大会で開催予定の公開シンポジウム「雪国の森と木を活かす」については、国土緑化推進機構「緑と水の森林ファンド」に応募し採択された。

(20) 他機関等の賞、奨励金、助成金、公募等の広報および候補の推薦： ウェブサイト、メールマガジン等により会員に対して随時、情報提供を行った。

(21) 学会運営の改善： 役員間や各委員間の連絡、代議員や会員へのお知らせに電子メールを活用し、会議費と通信費を節減するとともに、意思決定や情報提供の迅速化に努めた。計 6 回の理事会のうち 2 回はメール理事会によった。

(22) 林業遺産の選定： 新たに林業遺産 No.24「矢部村における木馬道と木場作林業」、No.25「我が国初の森林鉄道「津軽森林鉄道」遺構群及び関係資料群」、No.26「旧帝室林野局木曾支局庁舎および収蔵資料群」、No.27「日本近代砂防の祖・諸戸北郎博士の設計による溪間工事建造物群」、No.28「遠山森林鉄道の資料および道具類・遺構群」、No.29「海部の樵木林業」、

No.30「進徳の森と中村弥六の関連資料群」および No.31「北山林業」の 8 件を新規に認定し、2017 年定時総会で発表した。会員を通じて 2018 年度林業遺産候補の推薦を募り、林業遺産選定委員会において審議を進めた。また、第 129 回日本森林学会大会において林業遺産に関する企画シンポジウムと公募セッションを開催するとともに、日本森林学会公開シンポジウムで「林業遺産選定のこれまでの取組と成果」について報告を行った。

(23) 中等教育との連携： 第 129 回日本森林学会大会において第 5 回高校生ポスター発表を実施した。発表件数は 29 件、参加校数は 19 校で、その中から最優秀賞 2 件、優秀賞 3 件および特別賞 2 件を表彰した。発表ポスターと森林・林業を学べる大学・大学校紹介を掲載した「高校生ポスター発表 ポスター集」を印刷し、配付した。当日の概要と講評を森林科学 83 号に掲載した。第 130 回大会における第 6 回高校生ポスター発表の準備を進めた。

(24) 代議員および理事・監事候補選挙： 2018 年定時総会において理事および監事を選任した。

(25) 一般社団法人としての対応： 改選に伴い、理事を修正登記した。

(26) 会員名簿の発行： 2018 年度版会員名簿を発行し、正会員には P D F による配布を行った。

(27) 会員数の動向：

	2016/3/1	2017/3/1	2018/3/1	2019/3/1	前期との差
正会員	2396	2435	2383	2377	△ 6
国内一般会員	1822	1871	1839	1875	36
a)日林誌のみ	1279	1311	1283	1313	
b)+JFR	80	83	85	94	
c)+森林科学	209	215	218	220	
d)+両誌	254	262	253	248	
国内学生会員	563	553	533	492	△ 41
a)日林誌のみ	523	514	485	444	
b)+JFR	3	8	13	13	
c)+森林科学	13	10	13	10	
d)+両誌	24	21	22	25	
海外在住一般会員	4	7	6	4	△ 2
a)日林誌のみ	3	6	4	3	
b)+JFR	0	0	1	0	
c)+森林科学	0	0	0	0	
d)+両誌	1	1	1	1	
海外在住学生会員	7	4	6	6	0
a)日林誌のみ	3	1	2	2	
b)+JFR	4	3	4	4	
c)+森林科学	0	0	0	0	
d)+両誌	0	0	0	0	
機関会員	114	112	110	110	0
国内機関	112	110	108	109	
海外機関	2	2	2	1	
賛助会員	39	39	38	38	0
合計	2549	2586	2531	2525	△ 6
準会員	247	229	226	223	△ 3